



3

どうしてこうなった。

と、言ってみて、それは春花もまた上機嫌だったからだろう。

案外、彼女もまたこうして女子のみで親睦を深める一席を、密かに心待ちにしているところがあったのかもしれない。

そんな春花は 「ふんふん～」 と鼻歌交じりに雪絵の背に回っている。食事の鍋物を片付けに来た離れの担当の女中さんに、事のついでと頼んで持ってきてもらった 『櫛』 で、春花は雪絵の長い黒髪を梳いてあげていた。

春花の言い分はこうだ。

「仁美ちゃんがチョコレイトで愛を贈るなら、私も何か雪絵にあげないとね！ よし、じゃあ髪を梳かしてあげましょう！ グルーミングよっ たっぶり可愛がってあげる。うふふふっ」

とまあ、酒の影響か若干上気した顔で柔らかに笑むので、雪絵も断り切れず言われるがままに背を向けて座ったわけである。

「雪絵、何をカチコチになって座ってんのさ？ 春花さん、もしかしてこういう事をあんまりしないんですか？」

と横で見ている仁美が、少し呆れの入った顔で言う。

「いいえ、この子を組に迎えた当初から、私はちよくちよくやってあげていたわよ。最初は女の子にあるまじきお手入れ具合だったから、隙あらばね」

「隙あらばって……」

「ウチの大浴場でも一緒に湯浴みをしたりもしているんだけど、どうも他人行儀というか、打ち解けなさがあるというか……母さん、哀しいなー」

「……………」

「心配しなくても、とって喰やしないでしょ、まったく」

口許を一文字にして半眼になる雪絵に、仁美はさらに呆れの色を強めて笑う。

しかし、別に雪絵としては春花に親しげにされるのが嫌だという訳ではない。ただ、いわゆるスキンシップは、かつての無邪気な少女を思い起こして、自然

ときこちなくなってしまうのだ。温もりに警戒するという訳ではなくとも、感じる安堵からの落差があるのではと、自分ではそうと知らず無意識に不安を感じているのかもしれない。

そういえば、と仁美は思う。こいつって親とかそういう近い人間に、当たり前前のことをしてもらってこなかったんだっけ……と。

付き合いが出来るようになってからは、屋敷を訪れた折に左馬ノ介とも会話をするようになった仁美。その左馬ノ介から、ちよくちよく聞き出すようになった雪絵の昔話を反芻し、改めてチョココンと座る友人を見つめる。

仁美は不思議と、胸がなにかキュンとする。

そんな自分の正体不明の感覚に、仁美は口元を緩める。

「でも、そんなに硬くならなくてもいいんじゃないかしら、ねえ？」

緩やかに、肩甲骨の下の辺りから少しづつ、細やかに櫛を入れていく春花。愛でるように、慈しむようにその手は動く。

「私は、雪絵の髪、好きよ。素直に伸びていて、心を注げばちゃんと応えて輝いてくれる」

明らかに――またおおっぴらに笑い声をあげたり、笑顔になっていなくとも、その当人にとっては楽しく感じていたり、幸せを感じていたりということはあつて嬉しく思う。

そして少し稚気にかられて、春花は雪絵の耳元で囁く。

「髪はね、ちゃんと応えてくれているのにね。手入れをしてあげたから、この一年で随分綺麗になってきたものね」

「……………う、うん」

その言葉が含む『あなたはいまいち応えてくれないわね』という意味合いを、さすがの雪絵も理解できたのだろう、カチコチのままに黙り込んでいる訳にもいかずに、どうにか返事をする。

以前の雪絵は、自分の髪のスガタを鏡で確認して、その質や美しさといった見た目に気がつかっていなかった。そういう習慣も発想も、希薄といって足り

### 第三章 太刀の式

---

ない程になかった過去を持つ。しかし、春花に組に迎えられてから後、春花や屋敷の女中たちから、ちゃんと身だしなみに気をつかうように言われ出し、ヘアケアの仕方などを半ば強制的に教え込まれた雪絵だった。

「身だしなみは武俠にも大切だって、春花さんも言っていたから、少しはましにしてもらえて、私も良かったよ」

「オイオイ、嘗められないために見た目にも気をつかうのは当然だけど、お前も女の子なんだから、オシャレを楽しめばいいんだよ」

「オシャレ？」

仁美としては口が拙い友人に助け舟を出した台詞だ。しかし、自分のちよつとした皮肉に水を差されても、気を悪くせず、むしろそっちの方が好みの話だと春花は微笑む。

「そうねえ、女の子にとって髪に気をつかうのは自分を磨く事と同義ね。その娘の『心』の顕れとさえ言えるわね」

「.....『心』かあ」

その言葉を聴いて、固まっていた雪絵は今度は顔を俯きかけ、瞳を曇らせた。

雪絵、また考えが硬くなってるぜ。と仁美は左馬ノ介から聞いた話を思い浮かべ、雪絵の思惟を理解しつつも、再思三孝にはまることを危惧した。

ただ、これはもう、雪絵という人間の性格なのだろうと、仁美も半年を超えた付き合いで分かってきていた。

しかし、それを同様に分かっている春花は――一応は“母親”である彼女は――そこで腫物を触るような扱いをせず<sup>つつ</sup>に、もう少し突いていくようである。

納得いかないことがるのなら、悩めばいい。思いつめないくらいに。

そこが大らかである仁美と、自在である春花の違いではある。

「まだ考えがまとまっていない風ね。そんなに自分の心の在り方が気になるかしら、雪絵」

「気になるっていうか.....」

「ううか？ 納得いかない？ 全部がすっぽり自分の心の底に納まらないのか



しら」

「うん……、あちらを立てればこちらが立たない、かな」

「ふふ。さしずめ、人を想う尊意が盾で、自らの内の人を視る感情が鋭利な矛かしら。けれど、それは決着のつかない闘いよ。矛盾の言葉の通りにね」

「じゃあ、どうしたらいいの!？」

話をしながらも髪を梳く手は止めないでいたので、突然くわと勢いよく顔をあげた雪絵は自分の頭皮に痛みを感じる。櫛が刺さったのだ。

「あら、ゴメンなさい」

「いたい……」

傍で仁美は「何をやってるんだか」という顔で二人を見つめている。

手で雪絵の頭を撫でてやりながら、春花はふう、と息をついて話す。

「雪絵、尊意を抱いた相手であってもね、憎んだり……暗い感情を抱くようなことは、実は武侠の生業をするうえでまある事よ。それをすべて気に病んでいたらどうこうとは言わないけれど、掬われることは刀を曇らせるわよ。ほどほどにしておきなさい」

「でも……私の胸の内が、ザワザワいって……苦しいんだ」

胸のザワつく感覚でも、春花に感じたモノとは随分違う、と雪絵は思う。そして彼女はその胸のザワつきが、自分の心が生じさせた自我というモノであると、なんとなく分かるようになっていた。

「だから……私は、私が納得したいんだと思う。そうして、私の武侠としての生を――刀に生きる道を歩んでいきたいんだ……」

「そう……。なら、いっぱい悩みなさいな。悩むのは心を綺麗に磨く道よ。今は先が見えなくて不安な想いもあるでしょうけれど、悩むことは、自らの心をきっと綺麗にしてくれるわ」

「うん……ありがとう、春花さん」

ニヤリと笑むのは仁美である。こいつは激励というモノも解するようになったか。日進月歩だねえ――と。

「けれどね、雪絵。あなたはあなたを視る者がいることを、これからは少しく

### 第三章 太刀の式

---

らい意識していったほうが良いわね。あなたを視て心配する人がいるという事をね。いいかしら」

「心配.....」

「自愛も必要ということ。自らの心が生む課題に、恐れず正面から向き合う気概は頼もしいわ。けれど、いつも俯き悩む顔をして、自分を責め立てている女の子がいたら、誰しも心配になるわ。だからね」

そう言って、春花はまた優しく髪を梳く手を動かす。

「少しだけでいいから、あなたが自分を愛しているところも見せてね。髪はね、『心』 だけれど楽しむものでもあるのよ。自分を愛できるように、人を癒すように、こうしてゆっくり、丁寧に梳いて、磨いて、慈しんでいけばいいモノなのよ、雪絵」

「.....わかった。髪の手入れはちゃんとする」

そんな春花の気遣いともとれる訓えに、雪絵はゆっくり顎を引いて頷く。伏せられた顔は、朱が差していた。

雪絵は思う。

自分で髪を愛でること。春花が自分の髪を愛でていること。それは結び付けて考えるに、自分は愛されている.....ということを暗に示されている気がした。

自分は愛されている。

それだけで、心が解<sup>ほど</sup>けて、硬い表情も、思惟さえも弛緩するような気がした。

実際は、そんなに単純な娘ではないのだという自覚があるのだが。

だが、そんな温かな気持ちが胸に湧くことを明瞭に覚えるほどに、人に愛されるという事を解した人間性も、発達した情緒も、かつては持ち合わせていなかった。それを感じる事が出来るようになったのは、他ならぬ今背にいる人のお蔭だ、と雪絵は心の底から思う。

(髪が綺麗になったのだとすれば.....それは春花さんが丁寧に梳かしてくれたからだ。梳いて、好いてくれたからだ.....)

(それは、春花さんが私に色々なモノをくれたからだ)

(.....それだけは間違いないといえる)

### 第三章 太刀の式

---

思えば、この髪がバサバサで尖っていたのが、しんなりと流れるような美しい長髪になった事だけではない。雪絵は春花と出逢ってから、実に様々なモノをその身と心に授かったと思ひ返す。

冬に出逢って、今も冬。

もう一年が経過した春花との時間。

「……そっか、もう一年が経ったんだ……」

「ん？」

ぽつりと漏らす雪絵の言葉に、春花と仁美は首を傾げて反応する。

「……そうね、あなたと初めて逢ったのは一昨年の暮れだったからね。一年と少しね、早いものね。いえ、むしろもっと長い間一緒にいる気もするけれど」

「……うん、私も一年という気がしない。変なカンジだ」

「でも、一年ねえ……。私はもう少し短い付き合いだけれど、雪絵はその間に結構変わったよね」

仁美がそんな事を言うのに対して、雪絵は顎をあげた。

「……変わった？ そうかな」

ふふふ、と笑みをもらし、春花が頷く。

「そうね。髪のことだけでなく、随分変わったかもね」

その様子は楽しそうで、これまでの時間を思い返していることが傍目にもよくわかる。

三人の和やかな顔。表の風が建物に吹きつける音が届く。それに伴って遠くでどきどきと雪がおちる。火鉢から登る熱の部屋に巡る勢いが、やや大人しくなってくる。

「そういえば雪絵、あれは最近どうなの？」

思い出したように春花は、雪絵の背に手を当て、問うた。

「あれ……って？」

「悪いユメにうなされていたって……言っていたでしょう」

ああ、あれか。と雪絵は息をつく。

### 第三章 太刀の式

---

思い出して辛くなる思いでのリフレイン。

それが雪絵の視るアクムのカタチ。

獅士堂の屋敷で寝起きをするようになってしばらく、最初は週に一、二度は視ていたユメ。そのユメを視るたびに、胸の締まる想いと、自らの愚かさを呪うことを彼女は繰り返してきた。

雪絵が傍目にも真面目に『刀を振るう事』を考え、そして周囲からも『堅い』と思われる性格になったのは、このことが原因であるのは、事情をしればそれもそうだと分かる。

また、仁美が初見で雪絵を『根暗そう』とつぶやいたのは、彼女のむっつりと考え込む特徴を思えば、あながち的を逸れていない見解でもあったと言える。

そんな雪絵という少女のパーソナリティに多大な影響を及ぼしたそれについて、しかし雪絵は思うところがあった。

「あれは、いいの。私のためにあるから、いいの」

「ふうん」

「寝起きは汗だくで、苦しくて最悪だけれど、あれが私に自分の至らなさを再確認させてくれるから……だから、例え嫌なモノでもね、私は……」

「私は？」

春花と仁美、二人そろって訊いてくる。

「大切なモノだと思う。だから、心配いらないよ」

「……………そう」

そっと、春花が雪絵の背中を撫で、仁美は腕を組んで、ストールの裏でニヤリと笑んだ。

経験を糧にできるのは、人としての強さだ。

そして、強さとは――<sup>したた</sup>強かな性格とは、命の遣り取りをする者にとって、必須だ。

情緒が不安定だったといえる雪絵だが、そういう『強さ』に関して、少



### 第三章 太刀の式

---

しではあるが、傍目に安心できる成長があったという事かもしれない。

心の成長。

武俠としての、それとは。

「雪絵も人の命を悼むということを学び、自分の心にしたのかしら……」

ぽつり、と春花は娘の背中に言う。その言葉に、雪絵はハツとして顔を上げ、後ろに座る春花を振り返る。雪絵のその表情を視た春花は、顔の前で両手を振って言う。

「ああ、ごめんね。さっきから私、何か暗い話ばかりしているわね。駄目ね、私。もう」

その春花の様子に、雪絵はふるふると頭を横に振って、

「ううん、私、そういう話を、春花さんに聞いてもらいたい。……武俠として、刀に生きる者として、未熟な私の知らないことだから、春花さんと話したい」

自分を慕う幼子の、そんな素直な様子に、小首を傾げて頬に手を添える春花。少し照れているのかもしれない。

しかし、同時に憂いを感じる。

刀に生きる我が子の 『成そうとしているモノ』 に、思うところはある。あるのだが――。

「けれど、それを認めて促してあげるのが、親の務めかしらね……」

「え？」

「いいえ。ただ、雪絵は勉強熱心な子だなあって。お母さん、嬉しいわ」

「お母さん……、嬉しい……」

「おいおい、何の話だったっけ」

と、仁美が微笑ましく見守りながらも、二人の取り留めもない遣り取りに苦笑して、会話の舵をとるように口を挟んだ。

何の話だったかといえば、雪絵は春花に聞いて欲しいことがあったのだと思い出す。そしてそれは、これまで何カ月も自分で抱え続けていたのだが、今は素直に口から出た。

「あのね、春花さん……、私ね、秋頃からずっと、考えていることがある。何

か、胸につっかえて、すっきりしないモノがあるんだ」

「何かしら」

それは何かと訊ねて、春花にはそれが秋頃からということを経験しても、一人の武俠との太刀合いに根ざしていることが理解できた。

「……あのね、あれは、気高い武俠だったんだよ。自分の苦境でも、心にある想いのために、命を賭して刀を振るうことを辞さない、そんな尊い武俠だったんだ」

「そうね……」

でも、と雪絵は唇を噛む。

「私は、そんな武俠を、“弱い者”だと蔑むことでしか刀を振るえなかった。尊意を心で理解しながら、私自身の弱さがそれを曇らせてしまったの」

「そう……」

「ねえ、春花さん。……私は、こんな私は、あの武俠に哀悼の意を抱いていると言っていい立場なのかな？ そんな心をしていると言えるのかな？」

「雪絵……」

こんなに思い詰めている風なのは、それだけ刀に生きることに真摯なのだろうな……と仁美は思う。友を労わる気持ちが湧いた。

けれど、刀を振るうことを生業とする者とは、雪絵のように、考えないようにしない訳にはいかない——そう在らなければならないと仁美も知っている。それを疎かにする武俠は、必ず道を誤るのだと、郷の歴史が示しているのだ。

仁美は、郷の内外から刀郷を見つめてきた家の者として、そんなことも幼い頃から教えられてきた。

そうした点で、坂本雪絵はこの郷の武俠としての在り方に適いだしている。

春花は、そんな武俠としてカタチになり始めている雪絵を、先に立つ者として理解し、共に歩む者としての言葉を口にする。

「雪絵、あなたは心を持ち、それを大切に育てているわね。それは武俠としても人としても素晴らしいことだと思うわ」

部屋に満ちる空気を暖めなおすのだろう、春花は立ち上がり、火鉢のもとへ

### 第三章 太刀の式

---

と歩むと着物の裾を正して膝を折り、金火箸を手に炭を割り、かき回す。

やがてほのかな熱が、部屋に巡り出す。

「けれどね、刀とは心でありながら、その心に惑わされ、捉われ、己が刀を曇らせてはいけないわ。それは自らを滅ぼす行為で、そして斬ってきた命を蔑にする行為だからね」

「……うん。でも、私には、この心しか出来ない。今の私には……どしたらいいか……」

ゆるやかに雪絵を見返し、春花は言葉を継ぐ。

「相対する者が胡乱であるならば、彼の心を知り、尊意を抱くこともなく斬ることもあるでしょう。私だって今迄散々そういうことがあったわ」

「そうなの……？」

「ええ。しかしね、武俠たる者は、己が刀で斬る命を大切にしないと、自らの身も心も滅ぼすことになるわ」

頷く雪絵。滅ぼされかけた身であるから、それを肌で感じて知っている。

「それに、それが出来ない者はこの郷の俠たれない、ただの下郎という見方もある。厳しいようだけれどね。刀を持つに値しない者といえるわね、それは。だってそれは、刀に命を賭ける者達への最大の侮辱だから」

「尊意を――命を尊ばない刀は、刀に生きる者達への侮辱……か」

仁美が言葉を整理するのを視て、雪絵は頷く。

春花は言う。おごそかに、瞼を半ばおろして。

「だからこそね、彼を知る余地があるのならば、その太刀合いを大きな糧とする心を持ちなさい。あなたがアクムを己がモノとしたように」

それにね、と春花は子供たちを視て続ける。

「心とは、相手を尊び、敬う気持ちに遣うモノ。相手を想う……相手の想いを知ることで苦しむのは、決して違うのよ。心しておきなさい」

「……………」

「……あのね、雪絵。太刀合う相手が気高い武俠だということは、実はまれで、そういう出逢いは有り難いモノだわ。だからあなたが、あの武俠とのことを重

く捉えているのは、私にはよく分かるわ」

また立ち上がり、畳の上を歩くと、春花は炬燵の自分の席に腰を下ろす。静かに猪口に手をつけて、唇を湿らす。

「でも、それはそれなのよ。対峙する者への尊敬の念を私たちは持って然るべきでも、けれどそれだけでは戦えない。尊ぶ心を逸した刀が醜悪であるように、相手を想うことに傾き過ぎた在り方はね、弱さなのよ」

わかるかしら？ と微笑む春花の声に、しかし雪絵は眉根を寄せた。

思考の枝葉が繋がらない。といつかに左馬ノ介あたりがした表現を引用することは出来るが。

「獅士堂の太刀のこころは、尊意を重んじるのに、相手を想うことに捉われるな、というのが……よく分からないよ」

自分も炬燵に足を入れながら、しかし目元を若干和らげる雪絵。

「でも春花さん、今の私はもっとお話が聴きたいよ」

素直な子ね、と思いながら春花は応える。

「それにね、あなたはあの武俠に否定観を抱いたようだけれど、別にそれはそれでいいのよ」

「え？」

「否定意思。それ自体は必要だわ。相手取る武俠には様々なタイプがいるのだから、いくら想いを尊ぶ心を持っていても、その全ての武俠を是と肯定できるわけがないのだから」

雪絵は仁美と顔を見合わせて首をひねった。

「どうも獅士堂の太刀のこころは、一本立ちでそれだけ見ていればいいという訳ではなくて、只々こう、あちらも立ててこちらも立てなくちゃいけないような事を言われるよ」

「うーん、尊意一本ですんなり成り立たないのは、そりゃ人の生き死にに関わっているんだから、綺麗ごとですまないし、無理もないと思うんだけど……」

難解だなあ、と若い二人は頭を悩ませる。

「あはは。もう少し言うとな、否定すべきモノは自分の心に正しく応えて否定

### 第三章 太刀の式

---

すべきだわ。そこに欺瞞や馴れ合いを持ち込んでこじらせるとね、自分を信じて  
ることができなくなるから」

「ふむ、軸を持ってってということですね」

と仁美はそこだけは頷いて返す。春花は話を続ける。

「そう、自分の軸——基準を持つこと。そのうえで相手を重んじることもする。  
両方があるということを知っておく。それが出来ることが肝心なんだけれど...  
...」

見ると、頭から煙でも立ち昇っていそうな、魚の焦げ付いたような瞳をして  
いる雪絵がいた。それを視て、あまり一辺に色々並べ過ぎかしら、と春花は苦笑した。

「ふふ。焦ることはないわ。今はそのままでいい。きっと気付くときがくる  
から」

「そうかな.....そうだといいな」

そう言って雪絵は気難しそうな顔で、炬燵の天板に顎を乗せる。

そこで春花は、珍しく意地の悪そうに瞳を細めて、ニヤリと口元を歪めて言  
った。

「もう、この子は本当にむっつりと御託を考え込んで、誰に似たのかしら？ 本  
当に本当、困った子ね」

「え.....!？」

その言葉は、雪絵にとってまるで冬場の空気よりも刺すような冷たさだった。  
雪絵は心にひびが入る思いだった。効果音が入ると 『ガーンツ』 であり 『ピ  
シリツ』 であったことだろう。

そんなだから、露骨に落ち込んでうつむいてしまった。顔が寒そうに青ざめ  
ている。

「あー、雪、大丈夫かっ ちょっと、春花さん!？」

「いや、あのね、これが否定観というか、ちゃんと自分の線引きをしておくの  
は、私も一緒よっていうことをね、実践してみてあげようと.....」

「.....」

「……………」

沈黙が痛い春花。

「ごめんなさいね、雪絵。冗談よっ」

そうして、雪絵の頭を優しく撫でる春花だった。

「ちょっ……猫を撫でているんじゃないんだから……っ」

「あはは、照れてる、こいつーっ はっはっは」

「ふふふ」

どうにか娘の機嫌がなおったようなので、春花も持ち直して普段通りの穏やかな顔で言う。

「でもね、真面目な話、こういう風に心を自在にすることは大切な。強張らない固まらない精神——捉われることは枷になることが大半ならばね。瞬間が生死を分かつ太刀合いならなおのこと」

「……うん。でも、どうしたら捉われることのない心でいられるのかな。それはよく解からない」

「うーん、アタシも捉われるなって言われることほど、案外捉われずにいることが難しいように思うな。なんか禅問答っていうか、仏門の訓えめいてますね」

仁美がそう言って来たのを聴いて、春花は少し考えこむ。黙り込んで天井を見あげた。

雨戸を揺らす風の音と、炭の焼ける音がパキリと聴こえた。

「春花さん？」

「……ううんとね、少し待っていて。考えるの足しになるか解からないけれど、そういう話につながるモノがあったはずだから」

言って、春花は席を立つと、羽織を着てしずしずと部屋から出ていった。

「……なんだろ？」

「さあ」

……続く。